

【論文】

古墳時代終末期の鑣轡の新例

― 菊川市篠ヶ谷 SA 8 号横穴墓出土轡の復原 ―

大谷 宏治

要旨 菊川市篠ヶ谷 SA 8 号横穴墓からは銜先環が「二重銜先環」の轡と、頸部が長く特殊な構造を有する鉸具が出土しているが、轡の形式が不明確である。これらの特徴的な部品は古墳時代の馬具の轡の部品としては類例の少ないものであることから、「二重銜先環」を有する轡や鉸具を有する馬具（特に轡）と比較検討し、当横穴墓出土轡は、鉸具造立開で有機質鑣を有する鑣轡である可能性が高いと想定した。

キーワード：篠ヶ谷 SA 8 号横穴墓 二重銜先環 鉸具造立開 鑣轡 古墳時代後期～終末期

1 はじめに

筆者は鉄製環状鏡板付轡（以下、円環轡）の研究を進めているが、1980 年代に調査が実施された静岡県内の円環轡の再調査を実施していた。その中で、報告書の図面を見る限り「銜介在型」（註 1）で、鉸具も出土していることから鉸具造立開円環轡と判断していた静岡県菊川市篠ヶ谷 SA 8 号横穴墓（以下、SA 8 号墓とする）出土の轡を実見するに当たり、「遊環」が銜先環に鍛接される、いわゆる「固定式遊環」構造（諫早 2010）をもつ轡であること、鉸具の頸部に半円形の切り込み（窪み）、あるいは円形の穿孔が存在する可能性が高いことがわかり、その判断が誤りであったことを認識した。そこでこの轡の特徴を筆者が集成した 1000 例以上の円環轡と比較したが、同様の類例はなく、SA 8 号墓出土の轡は円環轡ではない可能性が高いことが判明した。

なお、以下の分析に当たり、銜の中央でもう一つの銜と連結される部分（「銜内環」とされることがある）を唧金、銜の外側にあり、鏡板や引手が接続する部分を銜先環とする。また、いわゆる「固定式遊環」について、「遊環」は銜先環とは別に作られた環状の金具で、銜先環から遊離していることが前提の名称であるため、諫早直人氏が指摘するように「固定式遊環」は用語として違和感がある（諫早 2012- 註 42）。小論では、いわゆる「固定式遊環」（註 2）とされるものを、銜先環が二重に作られていることから、「二重銜先環」と仮呼する。また、「二重銜先環」の内側の環を「内環」、外側の環を「外環」と仮称する（図 1）。

このような「二重銜先環」を有する馬具は金銅装馬

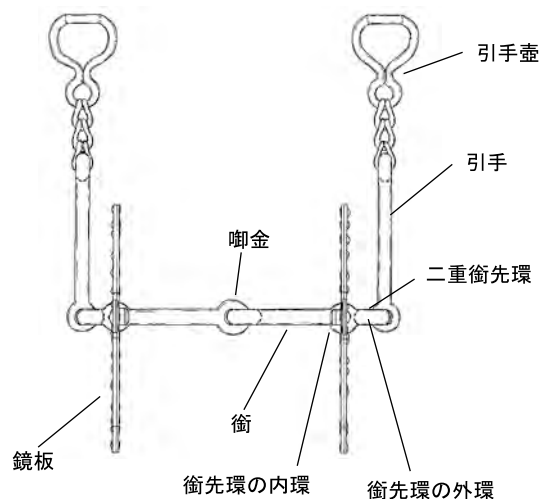


図 1 轡の部位名称

具や鑣轡の一部に採用される構造であり、本横穴墓例はその両者の可能性が想定できること、また、鉸具の頸部に円孔を有するもの、切り込みを有するものは少ないことから、これらの馬具との比較を通じて篠ヶ谷 SA 8 号墓出土轡を復原したい。

2 篠ヶ谷 SA 8 号横穴墓出土馬具について

（1）横穴墓の概要

立地 篠ヶ谷横穴墓群（明星大学 1983）は、J R 東海道線菊川駅から北北西に約 450 m、菊川市堀ノ内に位置する、菊川の支流の西方川北岸の丘陵尾根斜面に開削された横穴墓群（図 2）で、2 支群 19 基で構成される。篠ヶ谷 SA 8 号墓は、この 2 支群中の A 支群に属す横穴墓である。



図2 篠ヶ谷横穴墓群と関連する横穴墓の位置

当横穴墓群の南西に大淵ヶ谷横穴墓群（3支群37基）、その東側に西宮浦横穴墓群（1支群2基）などが所在する（図2）。

構造 篠ヶ谷 SA 8号墓（図3）は、菊川流域に特徴的なドーム形天井であったと想定でき、平面形はやや横長の長方形で、左袖は明瞭な袖を形成し、右袖は斜角である。横穴墓内に造付箱形石棺を設置するために右側袖部を取り払って拡張したようにも看取できる構造である。横穴墓の全長は3.5 m以上、最大幅2.2 m、残存高1.7 mである。玄室内には横穴墓の長軸に平行して造付組合式箱形石棺2基が設置されている。

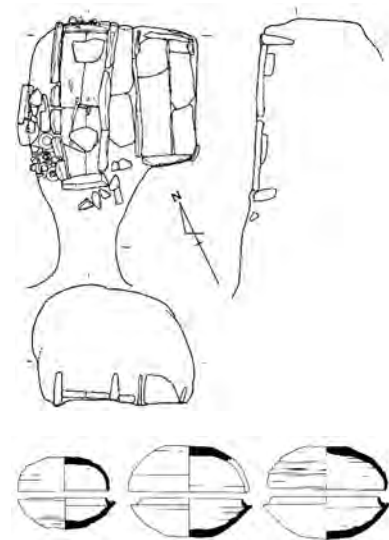
出土遺物 馬具片7片（轡2組の可能性が高い）、耳環3、玉類（切子玉4・褒玉5・管玉1）、靱尻あるいは柄頭1、大刀1、刀装具1、鉄鏃3点以上、須恵器（杯蓋18・杯身13・碗2・小型壺1・直口壺1・平瓶1・高杯1・甕2）が出土している。

横穴墓の築造時期 出土した須恵器は2時期に区分でき、古いほうは遠江Ⅲ期末葉（飛鳥Ⅰ期、鈴木2001）で開削段階に比定できる。一方、新しいほうは遠江Ⅳ期前半（飛鳥Ⅱ期）に位置づけることができることから、この時期に追葬が行われた可能性が高い。

（2）馬具の特徴

篠ヶ谷 SA 8号墓からは、轡2組分（の可能性が高い）と鉸具が出土している（現状で6点確認）。

轡 轡2組分のうち1組目（轡A、図4-1・2）は、いわゆる銜先に円環が2つ接続されるもので、筆者が「二重銜先環」とする構造である。



横穴墓 1:100
土器 1:8

図3 篠ヶ谷 SA 8号横穴墓の構造と出土須恵器

1は銜と引手が残存する。銜は二連銜の可能性が高く、片側が唧金から二重銜先環まで残存し、銜先環の外環に引手が接続する。鏡板（あるいは鏝）は内環に装着されていた可能性が高いが残存していない。銜先環の外環は内環よりも一回り小さい。残存状況が良好ではないため確定ではないが、残存する銜（1）は全長11.6 cm前後に復元可能である。銜先環は内環が直径3.0 cm前後、外環は2.6 cm前後に復元できる。外環に繋がれる引手は一条線引手で、引手壺はく字形に折り曲げられている。引手残存長11.7 cmであり、12 cm程度に復元できる。

銜（2）は銜先環のみの残存であり、1と同様二重銜先環であることから本来は1と同一個体であった可能性が高い。2は銜先環の内環2.8 cm前後、外環2.4 cm前後に復元できる。

なお、銜先環2の外環には薄い鉄板が錆着している。鉄製で花形のように見えることから、その観察が正しければしおでの座金具等の可能性がある。

もう一組（轡B、4・5・6）の轡鏡板と想定する4は弧を描き、弧の外縁に鍛接された部分が残存することから、立聞が鍛接された（造付立聞）円環轡の可能性が高いと判断した。篠ヶ谷 SA 8号墓は7世紀代に開削された横穴墓である可能性が高く、この時期の造付立聞は大型矩形立聞か鉸具造立聞円環轡が圧倒的に多いことから判断して、この2者のどちらかと判断した。また、立聞孔がある可能性が高いことから大型矩形立聞円環轡の可能性が高い。

つづいて、5は引手であるが、残存長が12.6 cmで

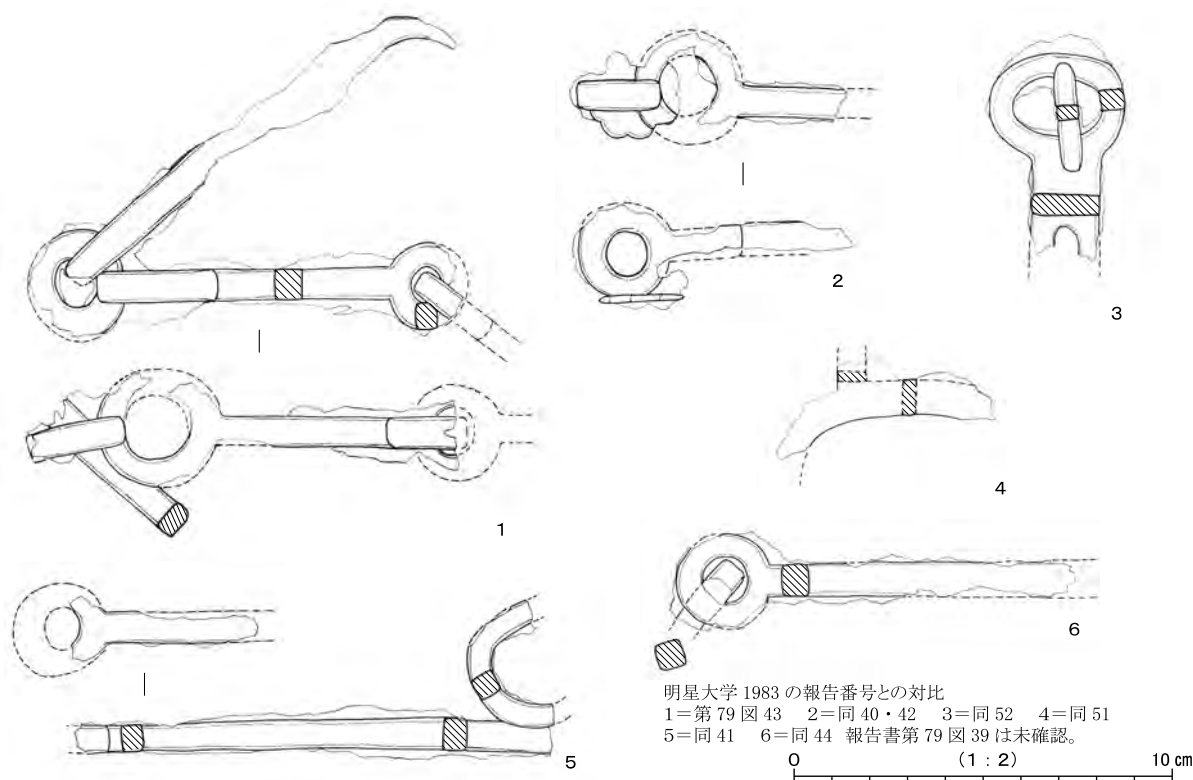


図4 篠ヶ谷 SA 8号横穴墓出土馬具実測図

あり、15 cm以上に復原できる。轡Aの1の引手（12 cm前後）よりも長いことから、轡Aの轡に伴う可能性は低い。つまり、5は轡Bに伴う可能性が高い。さらに、6は引手の可能性が高いが、轡Aに伴うとした場合、連結する可能性のある2の銜先環の外環はほぼ完存する一方で、6の引手環には銜先環と想定する環の一部が残存している。したがって、2と6は連結しないため、轡Aとは別個体と判断し、轡Bに伴うものと判断した。引手残存長 10.4 cmである。

鉸具 上記轡とともに鉸具（3）が出土している。鉸具の頸部が長く、下部に半円形の切り込み（窪み）が確認でき、二股（二脚）に分かれている。この部分は円孔の可能性を完全に否定はできないが、円孔としては幅6 mmと広いことから、円孔の可能性は低く、切り込みの可能性が高いと判断した。

鉸具（頭部）と頸部は一体で製作されている。刺金は頸部の先端に取り付けられている。錆のためT字形刺金か蕨手状刺金かの判断はできない。残存長 5.4 cm、鉸具（頭部）部分の長さ 2.6 cm、幅 3.6 cm、頸部残存長 2.8 cm、幅 1.8 cm、切り込み部分の幅 7 mm、切り込みの深さ 8 mm以上である。

3は鉸具造立聞円環轡の鉸具のようにも見えるが、それらの鉸具の下部に穿孔や切り込みは確認できない

こと、SA 8号墓例の頸部が長いことから、鉸具造立聞円環轡の鉸具と断定することはできない。

二重銜先環をもつ轡の復原に向けて 上述した轡Aと鉸具の特徴から、前者では「二重銜先環」の轡を手掛かりに、後者では切り込みを有する鉸具の類例を手掛かりに復原する必要があり、最終的に両者の特徴を有する轡を探し出すことで復原の妥当性を高めることが重要である。

3章以下では、「二重銜先環」と、鉸具を有する馬具（轡）をもつ事例と比較検討したうえで、篠ヶ谷 SA 8号墓出土轡Aの復原を行いたい。

3 「二重銜先環」をもつ轡

(1) 「二重銜先環」の分類

「二重銜先環」（表1、図5）には、銜先環の内環と外環が直交して接続するもの（二重銜先環A類）と、内環に平行して外環を取り付ける「8」字形に接続するもの（二重銜先環B類）の2種類が確認できる。

A類は篠ヶ谷 SA 8号墓例や、静岡県石ノ形古墳（図5-2）、同高根森8号墳（図5-16）、同半兵衛奥古墳（図5-17）などの事例がある（註3）。一方、B類は、愛知県名古屋市熱田神宮蔵十字文透心葉形鏡板付轡（図5-9）がある。B類に関しては日本列島で

表1 二重銜先環をもつ轡

遺跡名	所在地	市町村	轡の種類	タイプ	引手	内環外環	立開	時期	文献
浜井場古墳	福島	福島市	不明	交差式	一条線?	同大	-	古墳中期後半?	1
亀塚古墳	東京	狛江市	f字形	交差式	別造	同大	矩形	古墳中期後半	2
三珠王塚古墳	山梨	中央市	f字形	交差式	-	同大	矩形	古墳中期後半	3
石ノ形古墳	静岡	袋井市	f字形	交差式	別造	同大	矩形	古墳中期後半	4
キラ土古墳	三重	伊賀市	f字形	交差式	別造	外環大	矩形	古墳中期後半	5
倭文6号墳	鳥取	鳥取市	f字形	交差式	別造	同大	矩形	古墳中期後半	6
宮脇古墳	福岡	飯塚市	f字形	交差式	別造	同大	矩形	後期前半	7
本郷野開102号土壇墓	福岡	大刀洗町	f字形	交差式	別造	同大	矩形	古墳中期後半	8
番塚古墳	福岡	荏田町	f字形	交差式	別造	同大?	矩形	中期末～後期初頭	9
鍛形原古墳	長野	松本市	内湾楕円	交差式	別造	同大	矩形	古墳後期前半	10
北本城古墳	長野	飯田市	内湾楕円	交差式	別造	同大	矩形	古墳後期前半	11
巨勢山75号墳	奈良	御所市	内湾楕円	交差式	別造	同大	矩形	MT15～TK10	12
寺口忍海H32号墳	奈良	葛城市	心葉形	交差式	別造	外環大	矩形	TK10	13
小畑3号墳	鳥取	岩見町	心葉形	交差式	一条線	外環大	矩形	TK209～	14
熱田神宮蔵	日本	名古屋市?	心葉形	8字式	-	内環大	矩形	6世紀前半	5
宮中野99-1号墳	茨城	鹿嶋市	鐙轡	交差式	一条線	同大	板状掛留式?	7世紀後半	15
奈良ノ号墳	群馬	沼田市	鐙轡	交差式	一条線	同大	板状掛留式?	7世紀後半	16
綿貫観音山古墳	群馬	高崎市	鐙轡	交差式	一条線	内環大	鉸具造	TK43-TK209	17
八幡観音塚古墳	群馬	高崎市	鐙轡	交差式	一条線	内環大	鉸具造	TK209	18
コウモリ塚古墳	長野	岡谷市	鐙轡	交差式	一条線	外環大	鉸具造	7世紀後半	20
半兵衛奥古墳	静岡	静岡市	鐙轡	交差式	円環?	内環大	鉸具造	7世紀後半	20
花沢出土	静岡	焼津市	鐙轡	交差式	円環	同大?	板状掛留式	-	21
高根森8号墳	静岡	島田市	鐙轡	交差式	一条線	内環大	鉸具造	TK209	22
篠ヶ谷SA8号横穴墓	静岡	菊川市	鐙轡	交差式	一条線	内環大	鉸具造	飛鳥Ⅰ～Ⅱ	本論
八代神社蔵	三重	鳥羽市	鐙轡	交差式?	円環	-	板状掛留式	8世紀	23
新鳳洞92-83号墳	韓国	清州	楕円形	交差式	一条線	同大	矩形	5世紀	24
水村里Ⅱ-4号墳	韓国	公州	楕円形	交差式	一条線	同大	矩形	5世紀	24
笠店里86-1号墳	韓国	益山	楕円形	交差式	一条線	同大	矩形	5世紀	25
福泉洞(東)1号墳	韓国	釜山	楕円形	交差式	-	-	矩形	5世紀	26
造山古墳	韓国	海南	f字形	交差式	別造	外環大?	矩形	6世紀前半	27
宋山里古墳	韓国	公州 (未確認)	交差式	-	-	-	-	5世紀	24
松潭里25号墳	韓国	燕岐	鐙轡	交差式	一条線	同大	板状掛留式	5世紀	24
池山洞32号墳	韓国	高靈	鐙轡	交差式	一条線	内環大	半円形?	5世紀末	28
馬甲塚	韓国	咸安	鐙轡	交差式	一条線	内環大	板状掛留式	5世紀	29
火旺山城	韓国	昌寧	鐙轡	交差式	二条線	同大?	板状掛留式	統一新羅時代	25
雪峰山城	韓国	利川	鐙轡	交差式	二条線	同大	板状掛留式	統一新羅時代	25
彦南里	韓国	龍仁	鐙轡	交差式	二条線	同大	板状掛留式	統一新羅時代	25
扶蘇山城	韓国	扶余	鐙轡	交差式	円環	内環大	板状掛留式	統一新羅時代	25
扶蘇山城	韓国	扶余	鐙轡	交差式	円環	同大	板状掛留式	統一新羅時代	25
扶蘇山麓採集品	韓国	扶余	鐙轡	交差式	二条線	外環大	-	統一新羅時代	25
弥勒寺	韓国	益山	鐙轡	交差式	二条線	同大	板状掛留式	統一新羅時代	25
馬老山城	韓国	光陽	鐙轡	交差式	円環	内環大	板状掛留式	統一新羅時代	25
塔里採集品	韓国	慶州	鐙轡	交差式	円環	同大	板状掛留式	統一新羅時代	25
啓明大学校所蔵品	韓国	-	鐙轡	交差式	円環	同大	板状掛留式	統一新羅時代	25
伝朝鮮半島南部	韓国	-	鐙轡	交差式	円環	同大	板状掛留式	統一新羅時代	25

※タイプ＝二重銜先環の種類 交差式＝二重銜先環A類 8字式＝二重銜先環B類

は本例のみの可能性があり、このほかに確認できたと
しても数量は非常に少ないと想定される。

なお、二重銜先環ではないが、B類に近いものとして三重県伊賀市前山古墳（東海古墳文化研究会 2006）の十字文透心葉（方形）形鏡板付轡（図5－10）や群馬県高崎市（旧榛名町）しどめ塚古墳の十字文楕円形鏡板付轡（群馬県古墳時代研究会 1996）のように8字形の遊環が確認できる（註4）。

（2）「二重銜先環」A類を有する轡の特徴

篠ヶ谷 SA 8 号墓例は「二重銜先環 A 類」であることから、A 類を中心に比較検討する。

板状鏡板付轡 A 類の代表例は、f 字形鏡板付轡である。静岡県石ノ形古墳（図5－2）、三重県キラ土古墳など日本列島内で少なくとも 8 例が確認できる（表1）。また、長野県飯田市北本城古墳（図5－4）、奈良県御所市巨勢山 75 号墳（図5－6）などの金銅

装内湾楕円形鏡板付轡で確認できる。さらに、奈良県葛城市寺口忍海 H32 号墳出土の心葉形鏡板付轡（図5－7）に確認できる。これらの事例は、いずれも別造り引手壺を有するもので、時期的には 5 世紀後半～6 世紀前半に位置づけられる可能性が高い。

これ以外では、鳥取県小畑 3 号墳出土の鉄製心葉形鏡板付轡（図5－8）がある。時期は TK209 型式期以降に位置づけることができ、篠ヶ谷 SA 8 号墓例よりも須恵器で 1 型式古いか、ほぼ同時期に位置づけることができる。

また、この二重銜先環 A 類は、韓半島で確認されている（諫早 2012）。金銅装馬具では公州新鳳洞 92-83 号墳、益山笠店里 86-1 号墳などで出土した金銅装楕円形鏡板付轡に確認できる。また、海南造山古墳から出土した f 字形鏡板付轡が挙げられる（註5）。韓国で出土する二重銜先環 A 類に伴う板状鏡板付轡は、日本と同様 f 字形鏡板付轡と内湾楕円形鏡板付轡であり、

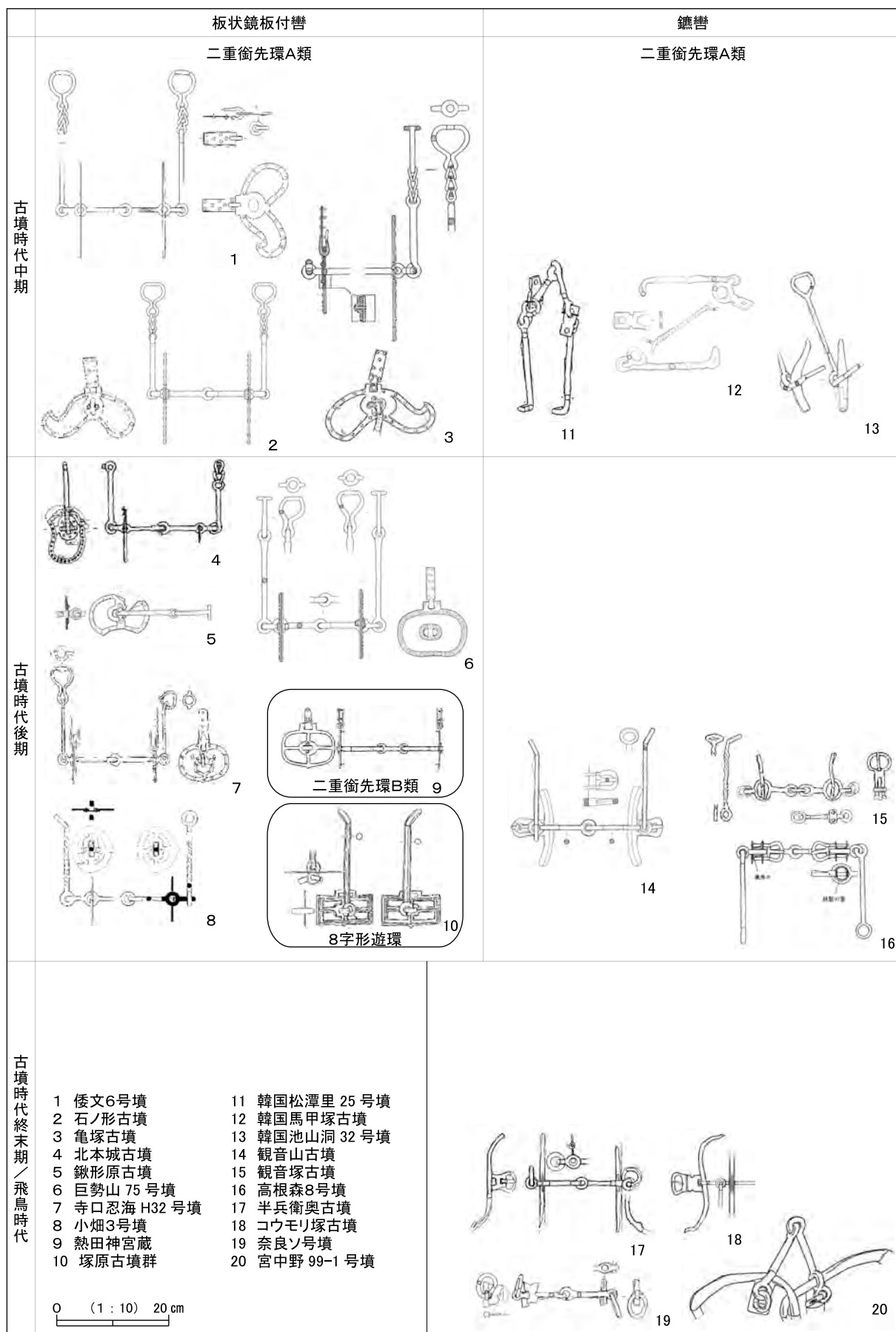


図5 二重銜先環をもつ轡の編年の位置

百済と伽耶地域で出土している（諫早 2010）。時期的には5世紀から6世紀初頭ごろに位置づけられる可能性が高い（諫早 2010・2012、権 2013、註 6）。つまり、韓半島と日本列島ともに同形式の轡に二重銜先環A類が採用されており、馬具生産にあたって関係が深かったことがうかがえる。

これまでにみてきたように、金銅装板状鏡板付轡については、篠ヶ谷 SA 8 号墓と時期的に隔たりがあり、かつ日本列島出土の二重銜先環A類を有する金銅装板状鏡板付轡とは引手壺の構造にも差異が確認できることから、篠ヶ谷 SA 8 号墓例と直接的に関係があるとは考え難い。

一方、篠ヶ谷 SA 8 号墓に近い時期の板状鏡板付轡は、小畑 3 号墳の鉄製十字文透楕円形鏡板付轡である。小畑 3 号墳の二重銜先環は、銜先環の内環が 2.4 cm、外環が 2.8 ～ 3.0 cm と引手を取り付ける外環の環のほうが大きい点が異なる。また、板状鏡板付轡では、篠ヶ谷 SA 8 号墳と同時期のものは本例のみであり、直接的な影響があるかどうかの判断は難しい。

鑢轡 二重銜先環を有する轡は、上述した板状鏡板付轡のほか鑢轡に多く確認できる（表 1）。

群馬県観音山古墳（図 5 - 14）、同観音塚古墳（図 5 - 15）、静岡県高根森 8 号墳（図 5 - 16）など TK43 ～ TK209 の時期に位置づけられるものと、長野県コウモリ塚古墳（図 5 - 18）や静岡県半兵衛奥古墳（図 5 - 17）など 7 世紀後半～8 世紀前半ごろに位置づけられるものが確認できる。

韓半島でも二重銜先環をもつ鑢轡が、燕岐松潭里 25 号墳（図 5 - 11）、咸安馬甲塚古墳（図 5 - 12）高霊池山洞 32 号墳（図 5 - 13）などで出土しており、5 世紀代に位置づけられる（諫早 2012）。

また、韓半島では統一新羅時代の、昌寧火旺山城や扶余扶蘇山城出土例など鑢轡にも二重銜先環を有する鑢轡が確認されている（諫早 2012）。統一新羅時代の鑢轡は 7 世紀後半以降に位置づけられること、引手が二条線引手あるいは円環引手であること、金属製鑢轡であるなどの差異が確認できる。

したがって、二重銜先環を有する鑢轡は韓半島のものが時期的に 5 世紀代と 7 世紀後半以降に位置づけられているため直接的な関連性は低いと想定でき一方で、板状鏡板付轡とは異なり、日本列島内で出土した二重銜先環を有する鑢轡のうち観音山古墳や高根森 8 号墳は 6 世紀後半から 7 世紀初頭、半兵衛奥古墳などは 7 世紀後半～8 世紀前半ごろに位置づけられ、篠ヶ

谷 SA 8 号墓の開削時期と想定される 7 世紀前半を前後する時期に確認されている。さらに、二重銜先環をもつ鑢轡が 9 例出土している。同時期の板状鏡板付轡板付轡よりも二重銜先環を有するものが多く、量的にみれば篠ヶ谷 SA 8 号墓例は鑢轡の可能性が高くなる。

また、日本列島出土の二重銜先環を有する鑢轡のうち、観音山古墳、半兵衛奥古墳、コウモリ塚古墳など 9 例中 7 例は金属製鑢である。篠ヶ谷例も金属製鑢を伴う可能性は排除できないが、金属製鑢は出土していないため、金属製鑢轡である可能性は低い。一方で、観音塚古墳、高根森 8 号墳例は有機質製鑢である。篠ヶ谷例が鑢轡であるとすれば、有機質製の鑢を有する鑢轡の可能性が高い。なお、この 2 例は鑢を取り付ける銜先環の内環が外環よりも大きいという特徴が確認でき、この特徴は篠ヶ谷 SA 8 号墓とも合致する。

4 鉸具を伴う遺物

（1）鉸具を伴う遺物

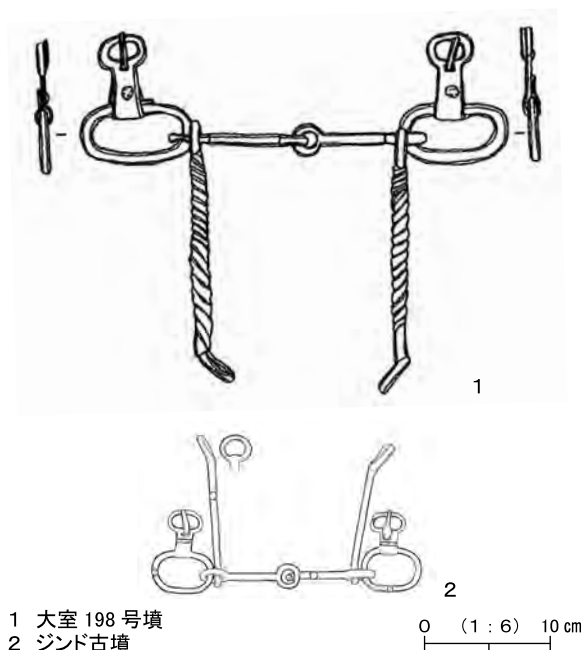
鉸具を有する遺物は、轡の立間・杏葉・障泥金具・鉸具などの馬具のほか、腰帶金具・鈎帶金具のバックルなどが確認できる。篠ヶ谷 SA 8 号墓出土の鉸具は、鉸具部分（頭部）の外枠と頸部が一体で製作され、刺金のみが可動する構造で、頸部以下が欠損したものである。つまり、頸部をもたない外枠と刺金だけで構成される鉸具とは形状が異なる。また、帯金具のバックルと篠ヶ谷 SA 8 号墓の形状が大きく異なることや、鉸具以外に腰帶金具に伴う遺物が出土していないことから帯金具の可能性は低いいため、ここでは馬具の可能性が高いと考えて分析する。

（2）鉸具造立間を有する馬具

鉸具造立間を有する馬具には、円環轡、鑢轡のほか、杏葉・障泥金具がある。筆者の感覚では、円環轡・杏葉・障泥金具の鉸具の頸部は基本的に 2 cm 以下と短い。杏葉・障泥金具は、高崎市観音塚古墳の杏葉（高崎市教委 1992）や、静岡県長泉町原分古墳（静岡県埋文研 2008）の障泥金具のように頸部は短く、また鉸具（頭部）が可動する構造になっていることが多く、篠ヶ谷 SA 8 号墓例とは大きく異なる。

一方で円環轡・鑢轡の中に 2 cm を超えるものがあるため、それらとの比較を行いたい。

鉸具造立間円環轡 鉸具造立間円環轡の鉸具は通常刺金を固定するための円孔以外に頸部に孔が穿たれることはなく、切り込みを入れられることもない。鉸具



1 大室 198 号墳
2 ジンド古墳

図 6 長い頸部を有する鉸具造立開閉環轡

は直接鏡板に鍛接されるため、特に円孔や切り込みは必要ない。

しかし、長野県大室 198 号墳例は、楕円形環に別造りした鉸具の頸部を U 字形に折り曲げ、環を挟み込み、環（鏡板）の脱落を防ぐため頸部を鉸留めする（図 6-1）。この鉸が抜け落ちれば円孔として残存する可能性が高い。ただし、大室 198 号墳例の鉸頭が 6 mm ほどであり、鉸脚はもう少し幅が狭いものと想定できることから、脚部の幅が 6 mm ある篠ヶ谷 SA 8 号墓例とは用途が異なる可能性が高い。また、この轡の銜先環は二重銜先環ではなく、通常の単環の銜先環である。

また、京都府ジンド古墳（図 6-2）は頸部が長い鉸具造立開であるが、頸部に穿孔はない。また、銜先環は二重銜先環ではなく、通常の単環の銜先環である。したがって、両者とも鉸具の形状は類似するものの全体的な特徴は篠ヶ谷 SA 8 号墓例とは異なる。

鑣轡 鉸具造立開を有する鑣轡は 8 例確認できる。群馬県高崎市観音山古墳（図 5-14）や長野県岡谷市コウモリ塚古墳（図 5-18）のように鉄製鑣に直接鍛造あるいは嵌めこまれるものと、群馬県高崎市観音塚古墳（図 5-15）や静岡県高根森 8 号墳（図 5-16）、群馬県藤岡市本郷出土品（和田 1917）、福岡県新行坊古墳（嘉穂町教委 1981）のように有機質の鑣に嵌めこまれるものが確認できる。また、頸部がやや長い 2 cm 以上と長いものが多い。

特に観音塚古墳例や藤岡市本郷出土品は有機質の鑣を有する鑣轡の鉸具の頸部が二股に分かれ、銜先環の

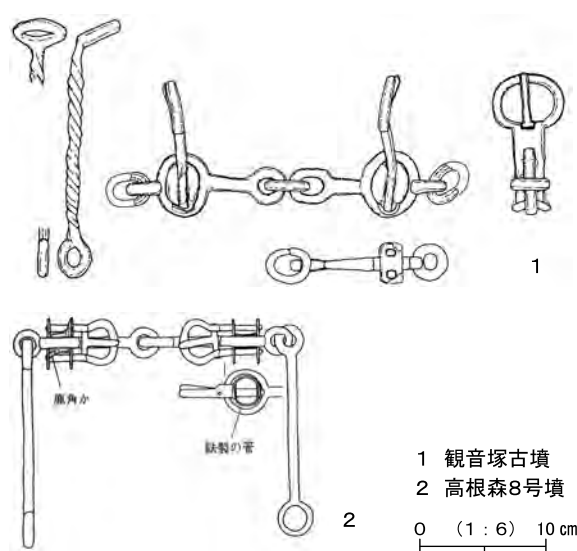


図 7 篠ヶ谷 SA 8 号墓出土轡 A と関連する鑣轡

内環をその切り込み（二股）部分に嵌めこみ、さらに内環に装着された有機質の鑣に嵌めこまれるものである。また、これらの鑣轡のうち、藤岡市本郷出土品、福岡県新行坊古墳以外はいずれも二重銜先環をもつものである。さらに、有機質鑣を有する観音塚古墳例、高根森 8 号墳例ともに、二重銜先環の環径よりも銜先環の環径の方が大きいという特徴が確認できる。したがって、篠ヶ谷 SA 8 号墓例は鉸具においても鑣轡との関係が深いといえる。

5 篠ヶ谷 SA 8 号横穴墓出土轡の復原

篠ヶ谷 SA 8 号墓出土二重銜先環を有する轡と、頸部の長い鉸具をもつ馬具について類例をみてきた。

前者は、板状鏡板付轡と鑣轡に確認できるが、前者のうち金銅装板状鏡板轡は 5 世紀～6 世紀前半に収まるものであり、時期が大きく異なることなどから直接的な関係を見出すことは難しい。前者のうち鉄製板状鏡板付轡をもつ小畑 3 号墳例が同時期であるが、1 例のみであり、二重銜先環が板状鏡板付轡に主体的に用いられたとするには躊躇する。また、板状鏡板付轡の事例は、銜先環の内環と外環の両者がほぼ同径か、外環の方がやや大きい傾向にある。したがって、板状鏡板付轡とは形状が異なることから板状鏡板付轡の二重銜先環の影響を直接的に受けているとは考え難い。

一方で、篠ヶ谷 SA 8 号墓と前後する時期の鑣轡は、基本的に二重銜先環である。特に有機質の鑣轡を有する観音塚古墳例や高根森 8 号墳例は鉸具を立開として採用する鑣轡である。篠ヶ谷 SA 8 号墓例は二重銜先環と、頸部が長く、二股に分かれる特徴を有する鉸具

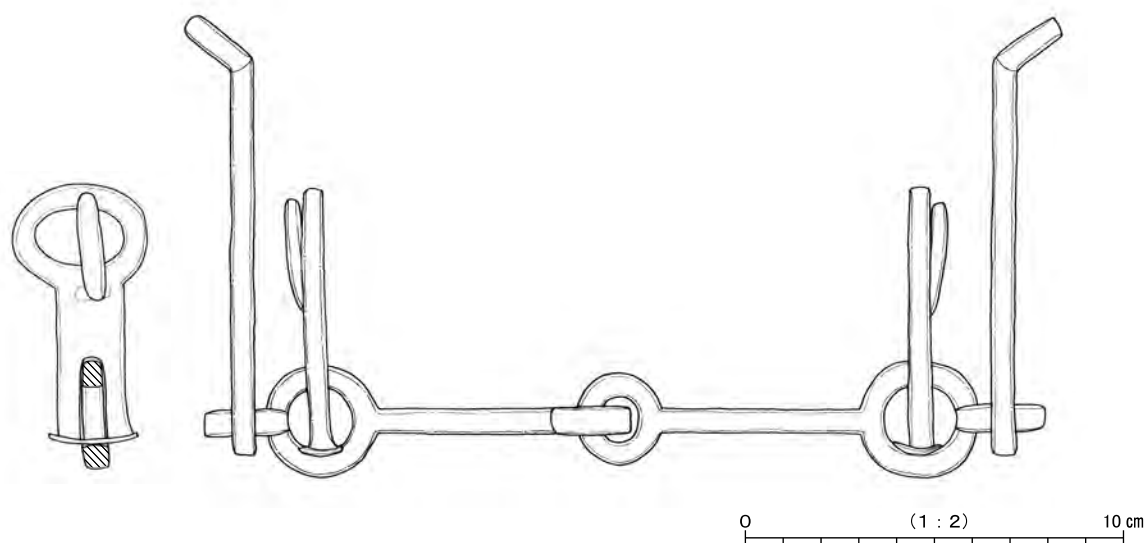


図8 篠ヶ谷 SA 8号横穴墓出土轡轡（轡A）復原図

の二つの特徴を有している。また、篠ヶ谷 SA 8号墓例は、内環が、外環よりも5 mmほど大きい。轡轡は、特に有機質の轡の場合は、轡を嵌めるため、引手を絡める外環よりも大きい内環が要求された可能性が高いが、この特徴もこの2例と一致する。

つまり、ここまで検討したように、篠ヶ谷 SA 8号墓では金銅装轡をはじめ金銅装馬具が出土していないことなども考慮して、篠ヶ谷例を復原するとすれば、観音塚古墳および高根森8号墳出土轡轡（図7）を参考に、二重銜先環を有し、鉸具造立開付の有機質轡を有する轡轡に復原できる（図8）。

6 結語

轡の復原 篠ヶ谷 SA 8号墓出土の二重銜先環を有する轡については、二重銜先環と、轡とは別に破断した状態で出土している鉸具の分析を通じて、鉸具造立開と二重銜先環を有する、有機質轡の轡轡に復原した。

轡轡は6世紀以降数量が減少する中で、その1例として今回、新たな事例を加えることができたことが最大の成果である。今後は、実用的馬具とされるものでは円環轡が主流である中で、少量といえども轡轡が生産された意味や、社会的価値を問う必要がある。

轡轡を有する意味 日本列島出土の轡轡は5世紀代に多く確認されているが、6世紀以降に位置づけられるものは10例ほどに過ぎない。その評価については稿を改めて行う予定である（大谷2015）が、その十数例中4例が静岡県内の出土であり、さらにうち2例が東遠江の出土である。また、観音山古墳、観音塚

古墳など100 m級の前方後円墳からの出土もあれば、篠ヶ谷 SA 8号墓のように横穴墓群中の1基に過ぎないものまで確認できる。古墳や出土品に共通点は見出し難いが、馬具の出土数が多い群馬、長野、静岡に存在しており、興味深い。轡轡の分析を行うことで古墳時代後期～終末期の馬具生産や馬具の流通を新たな視点でみるのが可能となるかもしれない。

また、韓半島の統一新羅時代の轡轡と比較すると一時期が異なるため、今後さらなる慎重な分析が必要であるが一、繰り返しになるが少ないながらも、韓半島とは異なる鉸具造立開と二重銜先環を有する轡轡という日本独自の轡轡を創出し（註7）、6世紀から8世紀まで生産していたことを評価する必要がある。

鳥取県小畑古墳群との類似性～篠ヶ谷 SA 8号墓出土轡轡に関連して（予察）～ 鳥取県小畑古墳群は馬具の出土数が多い古墳群であるが、このうち3号墳から、二重銜先環を有する十字文透心葉形鏡板付轡と帯金具を鉸具にはめる帯金具付鉸具造立開円環轡が出土している（図9）。後者は、このほか管見では福島県南相馬市羽山1号横穴墓、埼玉県深谷市四十坂10号墳151号土坑（馬殉葬土坑）、静岡県菊川市西宮浦1号横穴墓、富士市船津L62号墳の4基のみの出土であり、合計5例しか出土していない馬具である。この西宮浦1号横穴墓は上述したように篠ヶ谷横穴墓群に近接する横穴墓である（図2）。小畑3号墳のように同一古墳から出土したわけではないので断定できないが、近接する地域に二重銜先環を有する特殊な轡（註8）と、特殊な円環轡が出土しており、小畑3号墳の

被葬者と同様の馬具の入手経路が想定される。

鉸具造立聞をもつ鑣轡は、鉸具造立聞円環轡との関連が想定されている（大谷 1985）。一方で、帯金具付鉸具造立聞円環轡は鉸具造立聞そのものであることから、二重銜先環と、帯金具付鉸具造立聞円環轡が偶然かもしれないが同一古墳あるいは近接する古墳群で出土していることは一 2 事例でしかないが一、鉸具造立聞円環轡と鑣轡の関連性が高い、あるいは近い工房で生産された可能性が高いことを追証していることにつながることはないか。さらなる検討を加えて、古墳時代後期～終末期の鑣轡の意義について稿をなすことを約して筆をおきたい。

【謝辞】

小論を執筆するに当たり、篠ヶ谷横穴墓群・西宮浦 1 号横穴墓の金属製品の実測調査に際し、菊川市教育委員会 蔵本俊明氏に御高配いただいた。また、鈴木一有氏に韓国の資料についてご教示いただきました。さらに、文献収集などで川口武彦氏に、菊川市西宮浦 1 号墓の金属製品の実測調査及び資料提供で藤村 翔氏にご協力いただいた。明記して深謝いたします。

註

- 1 轡の各部分の連結について銜先環に引手・鏡板を組み合わせる方式を「銜介在型」とする。鏡板に銜先環・引手を組み合わせる方式を「鏡板介在型」、遊環に銜・引手・鏡板を組み合わせる方式を「遊環介在型」とする。
- 2 「固定式遊環」は、韓国では「二重外環」と呼ばれているが、筆者大谷が分類する「8 字式」（二重銜先環 B 類）に該当する「二重外環」が紀元前 1 千年紀から存在することなどから、諫早直人氏は筆者大谷の言う「交差式」（二重銜先環 A 類）を、8 字形の二重銜先環である「二重外環」と区分し、「固定式遊環」と呼称するとしている（諫早 2010）。
- 3 出典については、表 1 の参考文献参照。
- 4 この轡は銜先環に 8 字形金具を取り付けているため 8 字形の遊環としたが、8 字のくびれ部分に鏡板を嵌めているように観察できるため、二重銜先環の 1 種と判断できる可能性がある。
- 5 表 1 に掲載した韓国出土の轡のうち、報告書では鑣に覆われたりして二重銜先環（「固定式遊環」）か判断できないものがあるが、諫早直人氏の観察所見により（諫早 2012）、二重銜先環 A 類と判断した。
- 6 韓国の古墳の時期については、鈴木一有氏に御教授いただくとともに報告書を紹介していただいた。明記して深

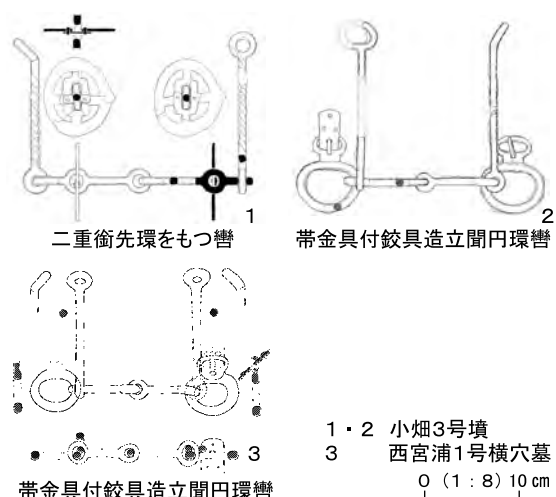


図 9 二重銜先環をもつ轡と帯金具付鉸具造立聞円環轡

謝いたします。

- 7 詳細は別稿（大谷 2015 予定）で述べるが、韓半島の三国時代に位置づけられる二重銜先環を有する鑣轡が百濟・伽耶地域に存在する（諫早 2012）が、それらの鑣轡に鉸具造立聞が用いられたものは確認されていない（張 2003, 2008）。また、二重銜先環を有する統一新羅時代の鑣轡については、立聞は鉸具造のものではなく「板状掛留式」（張 2003）であり、引手も二条線引手あるいは円環引手とされるものである。これらは統一新羅独自の型式である（諫早 2012）。したがって、二重銜先環、鉄製鑣、鉸具造立聞など個々の要素が存在している韓半島南部で生産された可能性を 100% 排除できないものの、鉸具造立聞で二重銜先環をもつ鑣轡は日本独自の型式の可能性が高い。
- 8 ただし、小畑 3 号墳の二重銜先環を有する轡は鑣轡ではないため、鑣轡の二重銜先環との関係は断言できない。今後の検討が必要である。

引用・参考文献

- 諫早直人 2010 「日本列島出土の轡の技術と系譜」『考古学研究』56 巻 4 号 考古学研究会
- 諫早直人 2012 「統一新羅時代の轡製作」『文化財論叢Ⅳ』奈良文化財研究所
- 大谷 猛 1985 「日本出土の『鑣轡』について」『論集日本原史』吉川弘文館
- 大谷宏治 2015 「古墳時代後期以降の鉸具式・板状掛留式立聞鑣轡の特質」『河上邦彦先生古稀記念論集』（刊行予定）
- 片山寛明 1987 「日本の轡—奈良時代—江戸時代」『馬の博物館研究紀要』1 根岸競馬記念公苑
- 片山寛明 1990 「和式轡の展開」『日本馬具大観』3 中世 日本中央競馬会
- 嘉徳町教育委員会 1981 『新行坊古墳』

- 川江秀孝 2010 「静岡市半兵衛奥古墳とその遺物Ⅲ」
『静岡県考古学研究』41・42 合併号
静岡県考古学会
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995 『京都府遺跡
跡概報』62
- 群馬県古墳時代研究会 1996 『群馬県内出土の馬具・馬形
埴輪』
- 権度希（武末純一訳）2013 「百済地域馬具の編年」『日韓
交渉の考古学－古墳時代』
「日韓交渉の考古学－古墳時
代－」研究会
- 斎藤 弘 1992 「馬具について」『観音塚古墳調査報告書』
高崎市教育委員会
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008 『原分古墳』
- 鈴木一有 1999 「律令時代における轡の系譜」『下滝遺跡
群2』浜松市文化協会
- 鈴木敏則 2001 「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須
恵器生産の出現から消滅』第5分冊
東海土器研究会
- 高崎市教育委員会 1992 『観音塚古墳調査報告書』
- 東海古墳文化研究会 2006 『東海の馬具と飾大刀』
- 長野県 1988 『長野県史』考古資料編全1巻
(4) 遺構・遺物
- 張 允禎 2003 「韓半島三国時代の轡の地域色」『考古学
研究』50巻2号 考古学研究会
- 張 允禎 2008 『古代馬具からみた韓半島と日本』同成社
- 花谷 浩 1986 「素環鏡板付轡の編年とその性格」『山陰
考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論
集刊行会
- 宮代栄一 2013 「長野県出土の5～6世紀の馬具」『文化
の十字路 信州』日本考古学協会 2013
年度長野大会実行委員会
- 明星大学考古学研究室 1983 『大淵ヶ谷 篠ヶ谷 西宮
浦』
- 和田千吉 1917 「珍らしき轡」『考古学雑誌』7巻11号
考古学会
- 12 御所市教育委員会 2002 『巨勢山古墳群Ⅳ』
- 13 檀原考古学研究所 1988 『寺口忍海古墳群』新庄町
教育委員会・檀原考古学
研究所
- 14 鳥取県教育文化財団 2002 『小畑古墳群』
- 15 片平雅俊 1998 「茨城県内出土古墳時代馬具集成
茨城県における古墳時代馬具の研究
(1)」『十王町民俗資料館紀要』7
十王町民俗資料館
- 16 群馬県古墳時代研究会 1996 『群馬県内出土の馬具・
馬形埴輪』
- 17 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
1999 『綿貫観音山古墳Ⅱ』
- 18 高崎市教育委員会 1992 『観音塚古墳調査報告書』
- 19 和田千吉 1917 「珍らしき轡」『考古学雑誌』
7巻11号 考古学会
- 20 川江秀孝 2010 「静岡市半兵衛奥古墳とその遺物Ⅲ」
『静岡県考古学研究』41・42 合併号
静岡県考古学会
- 21 大谷 猛 1985 「日本出土の『鏝轡』について」『論
集日本原史』吉川弘文館
- 22 川江秀孝 1992 「馬具」『静岡県史』資料編2
考古2 静岡県
- 23 金子裕之 2005 「鳥羽八代神社の神宝2」『奈良文化
財研究所紀要』2005
- 24 権度希 2013 「百済地域馬具の編年」『日韓交渉の
考古学－古墳時代』「日韓交渉の考古
学－古墳時代－」研究会
- 25 諫早直人 2012 「統一新羅時代の轡製作」『文化財論
叢Ⅳ』奈良文化財研究所
- 26 東亜大学校博物館 1970 『東萊福泉洞第1号古墳発
掘調査報告』
- 27 光州博物館 1984 『海南月松里造山古墳』
- 28 啓明大学校博物館 1981 『高霊池山洞古墳群』
- 29 国立昌原文化財研究所 2002 『馬甲塚』

【図の出典】

- 図1 石ノ形古墳の轡実測図（表1文献より）に加筆。
- 図2 国土地理院発行「1:50,000 掛川」を複写して加筆。
- 図3 明星大学考古学研究室 1983 より。
- 図4 筆者実測・トレース。
- 図5・7 表1の文献より。
- 図6 1－宮代 2013 より、2－京都府埋文センター 1995 よ
り
- 図8 群馬県観音塚古墳及び静岡県高根森8号墳出土鏝轡を
参考に筆者作成。
- 図9 1・2 表1文献より、3 藤村 翔氏提供。

【表1文献】

- 1 福島県立博物館 2006 『馬と人の年代記』
- 2 狛江市史編纂委員会 1985 『狛江市史』狛江市
- 3 山梨県 1999 『山梨県史』資料編2 原始・古代2
- 4 袋井市教育委員会 1999 『石ノ形古墳』
- 5 東海古墳文化研究会 2006 『東海の馬具と飾大刀』
- 6 鳥取市文化財団 2004 『倭文所在城跡・倭文古墳群』
- 7 九州前方後円墳研究会 1999 『九州における横穴式石
室の導入と展開』
- 8 大刀洗町教育委員会 2009 『本郷野開遺跡Ⅴ・Ⅶ』
- 9 九州大学文学部考古学研究室 1993 『番塚古墳』
- 10 長野県 1992 『長野県史』資料編1 (4)
- 11 飯田市教育委員会 2003 『北本城々跡 北本城古墳』